



## 自由指定席の功罪

大体、公式の国際会議における各国代表団の座席は、ほとんど指定席である。ILO総会でも、本会議場には各国の国名表示がテーブルの上に載っている。ところが、技術委員会ではこの国名表示が全然なく、ただテーブルが政府代表席、労働者代表席、使用者代表席と3つのグループに分かれているだけで、各代表はそれぞれのグループテーブルであればどこに座ろうと自由である。ところが、一度委員会の初日に陣取った席は、事実上自分の指定席みたいになってしまう。これが自由指定席と名付けられる所以である。事務局側と各代表の同一性確認の便宜上、席を一定するようにと要請している。

ところで、この自由指定席は慣れてしまえば何の不便もなく、むしろ“JAPON”など

という名札が目前にあるより、ずっと気分的に楽なものである。しかし、委員会の始まった当初は非常に不便なものである。

昨年の社会保障委員会でのこと。委員会審議の始まった金曜日、早速事務局原案に対する修正案の提出期限は、翌週の日曜日午前中と決められたのである。本省からの訓令で、わが方は修正案を提出しなければならなかったが、何分にも委員会が始ったばかりで、まだ各国の代表と顔がつながっていなかった時だったので、私はいささか慌てた。というのは、ILOの場合、修正案は提案者以外の者にセカンドされなければ委員会で討議されないことになっている。従って、修正案を提出するためには、あらかじめそれをセカンドしてくれる国を頼っておかなければ、折角修正

案を提出してもそれがセカンドされずに、討議されないで終わってしまう可能性がある。

(実際、私の出張した委員会でも数回経験がある。)ところが、前に述べたように、たとえば、英国代表にセカンドを頼もうと思っても、どこに座っているのが英国代表だか皆目見当がつかない、1人の英国代表を探すのに数十人もいる政府代表1人1人に自己紹介をしていたのではとても間に合わない。もちろん、各代表とも発言の際に名前と国名を言うから、会議の進行につれて自然に名前と顔とが一致してくるのだが、しかしこれには多少日数がかかるし、また目ざす相手が発言しない場合には全然役に立たない。

他の国際会議であれば国名札が各代表の前に置いてあるから、会議中にメモを渡しておいて、休憩時間や散会後にでも打合せをするということができるのだが、ILOの場合には、この手が使えない。その上、ILO総会ではレセプションの数が少なく、招待されるのも代表団のトップのみで、かれら以外にはレセプションの席で各国代表と知り合うチャンスは少ない。また、通常レセプションは会

議の冒頭よりも2週目に開かれることが多く、会議早々に各国代表と知り合うという役には立たない。

というわけで、私はこの自由指定席のために各国代表と知り合うまでの数日間は非常に苦勞をした。結局私は、ILOの日本人職員某氏に關係国の代表を紹介してもらい、後はいもずる式に顔をつなげることができた。

会議経験が未熟だったこともあるが、自由指定席が罪だったという一つの話である。

### レコード・ヴォートにご用心

ILOの委員会の採決は通常挙手によって行なわれるが、出席者の少くとも5分の1から請求のあったときは、記録投票を行なわなければならないこととされている。労働者側の修正案が少差で否決されたときなど、労働者代表からよくレコード・ヴォートの請求が出される。ところでレコード・ヴォートになると事務局員がまず政府側からアルファベット順に国名を読み上げていくのであるが、聞

きなれない国名が出てきて案外緊張するものである。(国名を英語読みするときとフランス語読みするときとで順番の変わる国がある。たとえば象牙海岸は、英語だと Ivory Coast でIの部になり日本のすぐ前だが、フランス語だと Cote d'Ivoire となってCの部となり繰り上がる。)

きて、よくある委員会での話。事務局員がアルジェリアから始まって、“ギャボン”と読み上げた時、日本の代表が突然“賛成”と叫んだということである。確かに“ジャパン”と音がよく以ている。とくに緊張して聞いている耳にはそう聞えてくるものである。ご用心、ご用心。

これはまた、ある大国際会議場での話。さる日本の委員が、“ギャボン”と呼ばれた時、やはり“賛成”と叫んだそうである。ところが隣に座っていた随員に注意されるヤサッと立ち上がり“オー・ミステーク”と手を振ったという話である。(金田伸二)

### 編集後記

「海外社会保障情報」は、海外の主要新聞やその他の定期および不定期刊行物に掲載された、各国における社会保障およびこれに関連する各種の動向を、できるだけ多くの人びとに伝えようとするものである。この小冊子の編集には、社会保障研究所長と若干の研究所員、および研究所専門委員から小山路男(横浜市立大学)と橋本正己(国立公衆衛生院)の両氏が参加し、さらに、研究所の外部から田中寿(国会図書館)、前田大作(全社協)、上村政彦(健保連)、および金田伸二(日本代表部、在ジュネーブ)と保坂哲哉(エカフエ、在バンコク)などの諸氏による御協力を得た。ここにこれらを記して謝意を表するとともに、今後、この小冊子をより一層充実させるために、広く大方の御批判と御協力をお願いする次第である。(文中敬称略)

### 海外社会保障情報 No.1

昭和43年1月31日発行 非売品

編集兼発行所 社会保障研究所  
東京都千代田区霞が関  
3丁目3番4号  
電話(580)2511~3